古き良きカンボジア（09・10・23）

岩　噌　弘　三（昭25・理）

一、はじめに

昭和四〇年（一九六五年）から二年間、いまのＪＩＣＡの前身である海外技術協力事業団（ＯＴＣＡ）からコロンボ計画の専門家としてカンボジアへ派遣されました。今のように「ＪＩＣＡ専門家」ではなく、名刺の日本語も仏語もともに「コロンボ計画専門家」と書き、国籍不明の形でした。なぜコロンボ計画専門家という肩書かと言いますと、第二次世界大戦後の一九五〇年に、英国がコロンボで英連邦外相会議を開催し、大戦後の復興計画をしたことによります。そこで策定されたのが「コロンボ計画」で、日本も遅れて昭和二九年（一九五四年）一〇月六日に、この計画に加盟しました。日本では毎年一〇月六日を「国際協力の日」として、関連の各種行事を実施しています。

カンボジアの山岳民族のための多様な民族語放送施設提供計画のために、ラオスとベトナムに接するカンボジア東北端のラタナキリ州を二〇〇七年に訪れるまで、政府調査団への参加、中部地域電気通信網整備拡充計画の策定など、数回に亘ってこの国で仕事をする機会がありました。

比較的最近のことは報道されていますが、静かな平和国家であった時代についてはあまり知られていないので、少しばかり話してみたいと思います。また、ポルポトが大虐殺を行った意図については、三年前から日本人も含む裁判官が任命されて準備が始まり、やっと開廷に至ったにも拘らず、日本政府が半分を拠出した一〇〇億円近くを使ってしまって問題になっている国際法廷で明らかにされる可能性がありますが、その根拠を明らかにしようとする出版物にまだ接していません。しかし当時の社会情勢を知るものについては推定が可能ですので、私的な解明を「ある一つの推測」として試みます。

二、赴任

当時は電電公社（今のＮＴＴ）に入社して一〇年目でした。人事担当の係長から呼び出されて、カンボジアへ行かないかと突然言われて驚きました。その頃は数少ない欧米への

短期出張に当たっても、社内放送で、出発便と時刻がアナウンスされ、関係者は空港まで見送りに行く時代でした。家内とも相談の上、比較的簡単にＯＫの回答をしました。当時の海外赴任の通例は、まず本人が現地入りをして、勤務先、大使館、日本人会との関係を確定し出来る限り早期に本来の仕事を軌道に乗せ、居住家屋の確保をした後で、一～二ヶ月遅れて家族が到着するのがルールになっていました。

私の場合、五歳の長男、二歳の長女と生後二か月の次男を抱えた家内に、家財を倉庫に納めて社宅を明け渡して、当時週に一回のみ香港経由で飛ぶエールフランスのボーイング七〇七号機で追って来させましたが、飛行機内でも長女が一人席にベルトで固定されて泣き叫ぶのも、次男のためにどうにもならず、機内食も取れずにやっとプノンペンに到着し、家内に可哀想なことをし、幼い子供連れの海外赴任の在り方を考えさせられました。

三、日本との関係

当時は組織的に援助を行っていました。医療センターを、首都の西約二〇〇キロメートルにある人口第二の都市であるバッタンの先のモンゴルボレー村に、派遣医師数名とともに開設していました。また農業センターをその手前に、畜産センターを首都北方約一〇〇

キロメートルのコンポン・チャムのメコン川を渡った先に、それぞれ多くの日本人専門家とともに設立して、三センターを中心とした活発な協力を実施していました。二〇〇一年に、ＪＩＣＡの現地事務所長に、現在の多様とも思える援助について方針を尋ねたところ、「まあ、人材育成でしょうね」との、総括的な方針がなさそうな回答を得ました。

当時は、欧米から見ればカンボジアは遠くて魅力がなく、次に述べる電気通信で例示するように日本のみが深く関与することができ、外国といえば何事でも日本が表に出てきて目立った存在でした。しかし、現在は韓国が首都プノンペンへの証券取引所の設立を援助したり、高層オフィスビルを建築したり、更に農業振興のために、農業センターの設立を援助すると大統領が約束するなど、日本よりも目立った存在になりつつあります。世界における韓国の積極性がここでも見られて、日本人の活力のなさが心配です。

電気通信分野の組織は、郵便・電報・電話を意味するＰＴＴと呼ばれ、その本部は今のプノンペン中央郵便局と同じ構内に、各種の電話交換機などの多様な通信機器とともに設置されていました。日本人専門家もここに勤務していました。国際通信は一組の短波送信機と受信機を使用して、時差に合わせて通信対地を切り替えて提供されていました。まず一〇時から一時間は日本向け、次いで香港、パリーと切り替えられました。日本向けは一時間しか割り当てられていないので、予め申込をして順次接続されましたが、時間切れで

通話できないことも多く、翌日回しとなってしまうこともありました。しかも短波通信はフェージングの影響で電波の強度が変わって通話が途切れることもあり、電話交換手は通話をモニターしながら、通話できなかった時間は実際の接続時間から差し引いて料金請求していました。国内通信は、当時の日本の町や村への市外通話に広く使用されていた技術である、電柱の腕木に二本の裸銅線を張る方式に依存していました。プノンペンとアンコールワットのあるシムリャップ（今のシェムリャップ、昔は地名を、多分現地語を基にした仏語で発音していたが、今はどこの地名も仏語のスペルが英語読みされていて、奇妙に聞こえます）までは、東京・名古屋間にほぼ相当する約三二〇キロメートルありますが、通話の増幅をしない裸銅線のみに依存していても、通話は可能でした。

ＫＤＤからは、送信と受信の専門家を、ＮＴＴからは線路（ケーブルや配線）、搬送（多重通信）および電話交換の三名を長期専門家として派遣し、さらに日本から、クメール語とフランス語の両方を一台の機械で送受できる「二ヶ国語テレプリンタ」を贈与しましたので、そのための短期専門家を複数回派遣し、電気通信分野はすべてが日本の支援下にありました。しかし、ポルポト以降はＮＴＴからの一人のみとなり、二〇〇七年には通信に関するＪＩＣＡ専門家は途絶えることとなりました。

放送については、当時は情報省の所管となっていて、私たちの頃はＮＨＫから番組関係

の専門家が派遣され、技術面はゴーホンブーという、日本で研修を受け日本人女性と結婚した優秀な中国人系技術者に依存していました。最近もＮＨＫから専門家が派遣されていて、三年前に現地でお目に掛りました。赴任した年の一二月に日本から寄贈したＴＶ放送局の開局式が、シアヌーク殿下の出席の下に行われました。多量の勲章が貢献者に授与されましたが、日本から派遣されていました江口専門家は既に帰国していたので、急遽、事務局が私をいかにもその専門家であるようにシアヌーク殿下に紹介して受賞させました。なお、この国では勲章はそれを受ける名誉を授けるのであって、勲章そのものにはお金を払うシステムになっていました。スタジオやテレビ塔を含む放送機材一式を日本から贈呈しましたが、仏語の放送プログラムを提供できず、プログラムはすべてフランスから提供されたので、カンボジア国民はＴＶ番組を見てＴＶシステムはフランスから提供されたと信じていました。

当時は、政府機関から多くの人々が日本に研修にでかけ、日本人の奥さんを連れて帰るのが最大の成果でした。日本人からすると、研修に派遣されるくらいの人々だから、定めし豊かな生活をし、将来性のある人であろうと、多くの立派な美人が嫁いで行きました。しかし、カンボジアへ来て見れば官吏の給与は低く、これらの女性の多くが、日本に一度帰国して美容師の研修を受けて、プノンペンへ帰って美容院を開設していました。しかし、

これらの人々の中から苦労の末に日本に帰ってきて当時のマスコミでも盛んに話題にされた内藤泰子さんと先のＴＶ技術者ゴーホンブーの奥さんである細川美智子さんの二人を除いて、全員がポルポトの犠牲になってしまいました。

また、タイ湾の海に近く、首都プノンペンから一〇〇キロメートルほど南に、ボコールという山があり、山上にカジノを持った保養地がありました。高冷地の適性を利用して、東京農大を出たばかりの長男とともに、日本から取り寄せた種をもとに新鮮で美味しい野菜類をプノンペンに供給し、外国人からも感謝されていた磯村さん一家がありました。気の毒に、この一家のうち両親はポルポトに殺害されたと聞いています。また、カンボジアに長く暮らして林業関係で活躍され、カンボジア語にも堪能だった人格者の只熊日本人会会長も犠牲になられたと聞いています。

私の在任時期は、商社の人々が多く活躍され、日本人全体は一〇〇人には満たない数であったようです。日本でＮＴＴや通信機メーカの人々ばかり接していた私にとっては、交際範囲を広めて視野を拡大する必要性を学びました。ＮＴＴのように巨大企業になると、毎晩飲んでも組み合わせが変わるだけで、同じ企業内の同類の人間相手に過ぎません。多様な人々と接してこそ、人間の幅が広がることを痛感しました。学士会館の会合表示が示すように、いずれの旧制高校もが、三水会、三木会、十八日会、二十日会などを設立して、

毎月、文科系と理科系両方の幅広い同窓生が集まった勉強や懇談などを続けてきたのも、バブルの発生まで見識の広い指導者を生んできた一因だと思います。

四、現地生活

（一）家族生活

プノンペンで最も重要な長い大通りで、交通量、オフィス、レストランも多いモニボーン通りで、国営保険会社が一～二階に入っていて、その上がマンションになっているところを住居に選びました（現在、ダイアモンド・ホテルとして転用）。八階の南向きの幅広い部屋であり、遠くまで広がる素晴らしい眺めを楽しめましたが、直ぐに空いていた理由が分かりました。強烈な太陽が差し込み暑くて仕方がありませんでした。日本とは反対に、日が射さないが熱帯のために十分に明るい、北側の部屋を確保すべきでした。三ヶ月後に帰任された前任の北川泰弘氏が住んでおられた北向きの部屋へ転居しました。

女中を雇うのが一般的で、私たちは子守も雇いました。中国人とベトナム人です。雇用条件を話すときは、日本人会のボーイをしている中国人に通訳をしてもらいましたが、後は言葉が通じないままの生活でしたが、このような状態でも一緒に生活できる自信が付き

ました。物価が安いので女中は多種類の料理を作り、私たちがその中で多く食べた料理から、この家族はこのような傾向の料理が好きだと推定して、次第に料理の傾向を変えていってくれました。残した料理を女中と子守が食べていました。手真似でほぼ通じました。女中部屋は同じ階の薄暗い区画にあり、ベルを鳴らすと駆け付けてくれる方式でした。日本人は若い家族が多かったことと、子育てに手間が掛からないので、この機会とばかりに出産が相続きました。カルメット病院というフランスの支援を受けた立派な病院がありました。平和が回復後、東海大学は日本の試験衛星を利用して、この病院との間で遠隔診断の試験を行っていましが、短期に終わった様子です。このようなときの最大の問題は言葉の問題だと思います。昔は医師はすべてフランスへ留学していましたが、最近は米国留学もあるようです。

長男は五歳で、現地では小学生として私立のジャンジャック・ルソーと名付けられた学校へ、契約したシクロという人力三輪車に乗せて通学させました。朝夕と昼食時の往復でした。教室では、すでに通学中の住友商事のお嬢さんの横に座らされて、彼女の通訳で助けられるシステムでした。毎月、通信簿が返され、成績とクラスでの順位が記されていて、現地校への溶け込み状況の進展が分かって有用でした。数か月過ぎると「おしゃべり」と注記されていて、一体なにを話しているのだろうと家内と共に不思議に思ったりしました。

帰国後は街の英文看板を見つけては仏語読みしていましたが、数か月で忘れて終ったようです。ちなみに、次男をロンドンの小学校へ転入させたときも、学校の先生は中国人は日本人と同じ言葉を話していると信じて、次男を中国人の横に座らせました。英国では、多くの外国からの転入児童のために、午後になると地域ごとに設けられた英語教育施設へバスで集められて語学教育を行っていました。基本的な学科を午前に応用的な学科を午後に配置して、教科配分を上手に行っていました。

長女が帰国して幼稚園に通ったときに、呼び出しがあって家内が行ってみれば、色盲の恐れがあると言われました。バナナを緑色に塗ったとのことです。現地では、バナナをマン（仏語の手のひら）という一房単位で購入して台所に常時吊るしておいて気楽に食べていましたが、緑色のままであり、木の上で熟させたので甘さも十分でした。日本のように早めに収穫して貨物船内で熟させないので、新鮮な歯ざわりでした。一般的に果物は品種改良が行われていなかったので、タイ産に劣ることが多く、パイナップルにも砂糖をかけました。日本の援助で上水道が完成していましたが、水に砂が含まれて出てくるので、蛇口には濾過用のガーゼを被せていました。そのために、一本四円ほどのコカコーラなどをケース何段分も購入しておくのが普通でした。また冷蔵庫に中国茶も冷やして置きました。

現地産の通称シアヌーク米はパサパサしていたので、もち米を混ぜて、内地米に近い風

味を出すようにしていました。また、練乳しかなく乳幼児用に牛乳がないので、代わりに山羊の乳を毎日入手する努力をしていました。

アンコールワットへ家族で車で出かけた時も、ベトナム人の可愛く若い子守を連れて行き、どのような手段かは忘れましたが大きなプールもあるシアヌーク殿下の別荘に私たち一家のみが宿泊しました。滞在一年を過ぎると、公用旅券の旅行許可地欄に、赴任地のカンボジア以外の近隣国を大使館で追加して貰えましたので、子供を女中と子守に任せて、家内とタイ、マレーシア、シンガポールを旅行しましたが、マレーシア上空で激しい雷雨に襲われた時に、揺れる機内で墜落すれば子供が孤児になると恐ろしくなったこともありました。

赴任に当たっては、醤油の一斗罐（一八リットル）を持って行きました。毎月、家内の姉に頼んで送ってもらった郵便小包には、味噌などの食料品、子供のための毎月発行される雑誌、現地で入手できない生活用品が入っていて、正に慰問袋で、到着が待ちどおしく、首を長くして待ちました。帰国に当たっては、プノンペン港にベトナムからメコン川を遡上してきた日本の三〇〇〇トン級の貨物船が時々入国したので、私などより古い人々は、船長の私的荷物として引越し荷物を託送された様子でした。私は、そのような手段が見つからず、国際郵便小包は最大一〇キログラムまで許されたので、すべての帰国引越し荷物

を約三〇個の国際郵便小包として発送しました。ベトナム製の美術品で壊れてしまったものもありました。

（2）医療

多くの日本人が利用していた、近くのドクター・リポールというフランス人の診療所に専ら依存しました。私が着任早々にベトナム式のシャブシャブで半生の淡水魚を食べて、その寄生虫が体内を駆け巡り首の付近に現れた時には、脳へ入るのではないかと心配して、飛びこみましたが、特別な処置はして貰えませんでした。北川氏は、その寄生虫が皮膚の表面下に現れて持ち上げたときに、そこを切開して取り出せばよいと簡単に言っておられました。しかし、幸運にもその内に病状がなくなりました。帰国後、ＮＴＴで海外派遣者向けに、熱帯病について東大助教授に講演してもらった時に、この話をしたところ、「タイ国にあることは知っていたが、カンボジアにもいましたか」と新発見とばかりに喜んでおられました。このフランス人の医師は、診断がつかない時には各種の病気を想定して多種類の薬を処方していました。子供が発熱したときは、頭ではなく腹部を氷で冷やしたので、家内は頭部に乗せ換えたりしました。散髪屋で感染して長男の頭部にひどい腫れものができた後は、散髪後、直ぐに消毒するようにしていました。子供が次々と麻疹（はし

か）に掛り、熱帯のためか回復が一月も掛かったりしました。
マラリアであったか、二回する必要のある一回目の予防注射をして、二回目をしようとしたら、売り切れていてできなかったこともありました。

（3）市街状況

当時のカンボジアの人口は約七〇〇万人と言われ、ポルポトが二〇〇万人近くを殺しても、いまは一五〇〇万人になっています。農村は人口吸収余力が無いために、溢れた人間はプノンペンに集まり、政府予算の半分は日本を最大とする外国による援助のために、なんらかの手段で生きていけます。静かな昔が全く想像できないほどに雑踏と喧噪に満ちています。昔の地図を現在の地図と比べると、メコン川の支流のトンレサップ川と沼地に挟まれて拡張できない北方とは違い、平野を利用できる東南に大きく拡大しています。また、トンレサップ川に架かる日本の援助による通称「日本橋」の先は行き止りで道路も作られず、全く役に立たない橋でしたが、ポルポトにより破壊されて日本が再構築した橋の先には今はレストラン、ホテル、商店などが連なっています。

また、「マルシェ」と呼んでいた白色の立派な建物である中央市場は、その言葉の通りに生鮮食物が主体で、四方向に延びる翼構造内で売られていた品物は、それぞれ特化して

整然としていました。いまの中央市場が雑然として、中央部分が多数の貴金属店で占められるようになったのは、内戦の影響です。昔は、マルシェからトンレサップ川までの間の一キロほどは、多くの貴金属店、家具、機械、衣類、レストランなど、ある程度以上のレベルの製品を扱う中国人の店が一杯でした。それが内戦の被害を恐れて、すべてが中央市場内に逃げ込んだと推定しています。

昔は自動車は極めて少なく、街路にはシクロという、お客や荷物を前に乗せ、運転者は後ろから漕ぐ三輪車が無数に市街を流していました。自宅から約五〇〇メートルにある中央市場やその先の中華街へ行くには、車は自宅前の大通りに駐車させたまま、シクロを利用しました。言葉は通じないので、腕で曲がる方向を示し、止まるときは「チョップ・チョップ（ストップの意味）」と言いながら手を上下に振りました。料金は現地人が払う何倍かを適当に渡して、相手が不満な様子でなければ、「それで良し」としました。

毎朝、通りや多くの美しい公園を、長い箒を持った人々が清掃していました。静かで美しい街は、小パリーとも言われ、日本への絵葉書には何時も「美しいプノンペン」の驚きを書いていました。

（4）シアヌーク殿下の治世

政治の実権はシアヌーク殿下が完全に掌握されていました。シアヌーク殿下は多芸で、美人のイタリー系のモニボン妃とともにお元気で、作曲をして音楽会で演奏されたり、映画を自ら製作したりもされていました。徳川時代の多芸な殿様や中国の昔の皇帝に通じるものがありました。しばしば、ヘリコプターなどで地方視察に出かけて、到着と同時に集まってくる地方民に多量のお土産を配って、民衆と良好な関係を保つように心がけておられました。また、比較的甲高い声で長い演説をしておられるのが度々ラジオから流れていました。

当時、ベトナムでは米軍の国境線爆撃などが激しくなっていて、日本からは心配する便りが度々送られてきましたが、逆に私たちは、朝七時過ぎにＮＨＫの短波放送を一五分ほど聞くのが唯一のニュースのため、ベトナム情勢の細かな進展も何も知らずに平和に暮らしていました。国境線の存在は有難いものであると思いました。米軍がラオスではホーチミン・ルートが存在するとして、かなり激しい空爆も行い、かつ山岳民族のモン族を訓練して対北ベトナム戦に利用したのと大きな違いです。いまも、これらのモン族が首都ビエンチャンと北方約二〇〇キロメートルの古都ルアンプラバンの間の地域に残存しています。本来、共産主義で反米であった現在のラオス政府とは相容れない仲のために危険で、殺害された外国人旅行者もあり、現在でも外国人にとって首都と古都の間は地上の旅行ができ

ず、空路に頼っています。ラオスで北の方へ旅行するには、先ず現地人に車をルアンプラバンまで回してもらって、ここから地上を北上します。

シアヌーク殿下が、私たちが働いているＰＴＴの自動電話交換機の部屋へ突然視察に来られたことがありました。最初、仏語で挨拶を始められたが、私たちが日本人であることに気付かれて、「日本人ならば英語の方がよいだろう」と言われて、直ぐに流暢な英語に切り替えられたのには、驚きました。

ニュースとしては、前記のＮＨＫ短波放送以外に、ＡＫＰと称して謄写版でＡ４版の裏表に仏語で印刷した一〇枚余りの国営官報兼情報紙を配達契約して毎日読むのが一般的でした。ＫＤＤの専門家宛てには本社から日本の新聞が送付されて来ていましたので、ＫＤＤの方々が読まれたあとで、だいぶん遅くなってからＮＴＴ家族に回して頂いていましたが、日本のことを細かく報じる内容にはあまり関心がありませんでした。

（5）水祭と専門家への厚遇

毎年、新月を迎える一〇月の終りごろ（一九六六年の記録では、一〇月二七日から二九日）に水祭が、王宮の前のトンレサップ川で催され、昼間は各種団体などのボートレースが行われ、日没頃から船を多彩な電灯照明で飾る船が次々と繰り出されました。ＰＴＴも

通信にふさわしいデコレーションの船を参加させていました。最後に中国製の花火がトンレサップ川上に華やかに打ち上げられました。私たち専門家も、王様とシアヌーク殿下連名の招待状を頂き参列しましたが、衣装に指定があり、「スーツは完全な白で、ネクタイと靴は黒」とあり、このためにのみ白色のスーツを新調しました。同伴の日本人婦人は、現地人にも好評の着物が多く見られました。

王宮の前のトンレサップ川に直角に向かう広い道の両側に儀仗兵が並んでいて、本来ならば、その中央を胸を張って歩かねばならないのを、日本人の被招待者は、慣れないことで気後れして、どちらかの側に近いところを大急ぎで歩いていました。この道の終端の川岸には、美しく彩色された屋根のついた特別な建物があり、招待者はそこへ案内されました。

フランス人が作った基準でしょうが、協力に来ている外人は仏語の「エキスペール」として特別扱いされることが多く、自動車のナンバープレートは赤地に白文字であり、多くの人が乗っていた白色の車体に映えました。いまは、日本の援助で再建されたトンレサップ川を渡る通称「日本橋」を利用して、陸路で北部のラオス方向やアンコールワットへ行くことができます。しかし、当時は橋の先の道路がなく、プノンペンから六キロメートル北西のところで、フェリーで川を渡る必要がありました。トラックを含む多量の車が順番

待ちをすることもありましたが、赤色のナンバープレートの車は優先的にかつ無料で乗せてもらえました。専門家が使う乗用車は、無税で母国から持ち込むか、外国へ発注して無税輸入ができました。帰国に当たっては、改めて輸入税を払って現地で売却でき希望者が殺到しました。奇妙に思ったのは、カンボジア人役人が少し長期に海外での研修を受けると、自分の身の回りの品として、無税で車を輸入する制度を作ったことです。このようなことも、クメールルージュの反感をもたらした原因に含まれたでしょう。

（6）交通事情

週に一便の日本からのエールフランス機が、自宅の上空を下降して行く音を聞いた途端に、車で飛び出しました。当時は道路も空いていて約一〇分で空港へ到着して、日本からの客が丁度タラップを降りてくるタイミングでした。空港にはタクシーもなく、迎えもなくて途方に暮れている現地事情を知らない日本人旅行者をプノンペンまで案内し、食事を提供し目的地への長距離バスに案内したこともありました。航空機の発着が全く無い日もありました。外で遊ばせるところがないので、子供たちを空港へ連れて行って、滑走路が見えるレストランで時間を過ごしたこともありました。屋外で子供が遊べるところがなく、アパートのテラスで家鴨を飼ったりもしました。一九八〇年代の末に、アフリカのウガン

ダの首都での重要な交差点で交通信号が青に替るのを待っていたら、警官が故障だから渡れと合図した経験の後に、プノンペンを訪れたところ、どこの信号も正常に機能しているのを見て、ポルポトに痛めつけられた国でもアジアは違うのだと痛感しました。

鉄道は、シアヌークビル港からプノンペンと、プノンペンからタイ国との国境であるポイペットの間に存在しました。帰国前に一度は経験しておこうと、短距離を乗車して、そこから引き返す列車に乗車したこともありましたが、内戦ですべてが消滅しました。

利用率の低い鉄道に比べて長距離バス網は発達していて、中央市場に隣接した発着場は喧噪を極めていました。便数も行き先も多かったので、地方への郵便物をバスの運転手に託す方がPTTよりも早くて確実と言われました。バスは多くの乗客を最大数取り込むために、通路はなく各列五人坐りで、乗降ドアは全ての列の右側に設けられ、ドアが多数並んでいました。ちなみに一九七五年過ぎに、英国の鉄道で、このようにズラリとドアが並び通路のない客車を見たことがあります。バスの屋根の上には荷物がうず高く積まれていました。乗用車が後ろから近づくと、後方に乗っている助手は身を乗り出して前方から対向車が来ないかを確認して、バスを安全に追い越すタイミングを手振りで教えてくれました。郊外の道路は、一時停車や万一のハンドル操作にも安全なように、十分な幅の路肩が取ってありました。居眠りなどで舗装から外れると、ザーザーと音がして慌てて本来の道

に戻したこともあります。プノンペンを離れると交通量が少なくなるので、建設コスト低減のために、少しばかり長い橋では一車線に絞り込まれていました。万一、両方から接近した時は、上り優先であり標識も立っていました。

（7）日本の文化政策

日本の伝統文化、工芸品、近代産業、最新交通機関など多方面に亘って日本を紹介する仏語の素晴らしい一六ミリフイルムが多数大使館に送られて来ていました。投映機とこれらのフイルムを借りてきて、職場や住まいの近隣の街角で夜に投影して、現地の人々に日本を知ってもらうことも熱心に行ったこともありました。外務省が宣伝臭の無い優れた映画を多数作っていたことに敬意を感じ、かつ日本人として誇らしく思いました。

（8）アンコール観光

カンボジア全体で昼寝の習慣がありました。政府は職員の負担軽減のため、勤務時間は朝七時から連続して午後一時三〇分までした。その後に帰宅して遅い昼食をとり、続いて昼寝をとりました。遅い昼食と昼寝を取った後の夕食のためにあまり食欲がありませんでした。一方、商店、事務所などの民間は、正午に一旦店や事務所を閉じ、夕方五時頃か

ら再開していました。従って、カンボジアに暮らしていた人のアンコール観光は、太陽光の強い午後はホテルで昼寝をして、涼しくなってから観光を再開しました。観光客は僅かの外人のみで閑散とした雰囲気のことが多く、年間二〇〇万人と言われる現在の観光客に比べて、主要なホテルはあまり大きくない白亜の「グランドホテル」程度しかなかった時代です。

北東へ四〇キロメートルほどのところに、紅色砂岩で構築され、細かな彫刻で女神が多数彫刻されている、小規模ながら素晴らしい芸術的な遺跡のバンテアイ・スレーがあります。バンコックからＩＴＵ（国際電気通信連合）専門家の長井淳一郎氏が来訪された時に、地元のＰＴＴ局長が普通の乗用車で行けると言ったので、この局長を案内人として、ＮＴＴから供与されていたトヨタクラウンで出かけました。ところがジャングルの中の砂の多い道で前進できなくなりました。ジャッキで後輪を持ち上げ、車内の床に敷かれていたマットを取り出して、そこへ入れて発車しようとしても失敗し、あがく毎に深みに陥ってしまいました。喉はカラカラとなり、次第に夕刻は近づき、このままジャングルで遭難することになるのかと悲嘆にくれていました。二～三時間以上も過ぎたでしょうか、軍のジープが通りかかりました。幸運にも、車の前部にスチール・ロープのウインチが取り付けられていて、それを使って悪路から引き出してもらって命拾いをしました。当時はそれほど

にバンテアイ・スレーは観光の対象外となっていました。

(9) フランスの影響

日本人からすると、フランスの優れた影響を感じて、日本も学ぶ必要があると思ったものも多かったです。しかし、ポルポトによりインテリや指導者が抹殺されたために、完全な断絶が発生して、いかにもアジア的な状況に戻ってしまっているのは残念なことです。

―プノンペン市内では、少なくとも一軒の薬局は終夜開店していて、夜間に閉店する薬局は、開店している薬局名とその場所を記したボードを、暗闇でも分かるように照明付きで店の表壁に表示していました。

―すべての申請書には、「私はこの下に署名します」と書いてサインすれば、それで有効でした。その後、三年暮らした英国や四年のマレーシアでも役所がどこにあるかを知らず仕舞いでした。日本は人間を信用せず且つトラブルを恐れて、役所の証明書を要求して役所の巨大化と住民の不便をもたらしています。ちなみに英国では郵便局は役所の出窓の役割を果たしていてパスポートの申請もできました。また英国では、運転免許関係の役所は、イングランドとは別の西のウエルズにあり、ロンドン地区住民を対象とする税務所機能はスコットランドにあって、すべてを郵便で処理して、首都の巨大化を防ぎ地方振興を

行っていました。

—市外の道路のカーブしたところは、夜でもヘッドライトでカーブの存在が認識できるように密着して白杭を立て、どちらの方向に曲がっているかが分かるような表示もなされていて、夜間でも安全に高速運転ができました。

—市外に設置された高さが五〇センチ余りの道路標識は、一キロメートルごとに立てられ、頭の赤い部分には、その道路の起点からの距離を、その下の白い部分には、その場所よりも先の方の主要対地とそこまでの距離を一個のみ表示し、これら数個の対地を順次繰り返し、進行すると共に対地を変えていました。例えば、現在の走行地から、静岡、浜松、名古屋、京都、大阪の地名とそこまでの距離がそれぞれ一個の標識上に表示され、これが繰り返されながら、その対地表示が次第に先に進むような形式です。日本は、高速道路標識を集中していて、一ヶ所に多数表示するので、必要な情報の読み取りが困難です。

五、言葉

観光地のアンコールワットのホテルでは、英語も通じると言われていましたが、仏語が全てでした。高校時代に日仏会館に少し通い、ＮＴＴでは将来の海外派遣に備えて、英語

の試験で選抜して、仏語とスペイン語の一〇名ほどのクラスを作り、週に三回夕方二時間ずつの語学研修が行われ、二年ほど参加していました。しかし、現地では全く役に立たず、いつも仏和と和仏の辞書を手に持っていました。一年過ぎないうちに、その必要がなくなり、二年目には全く不自由がなくなりました。NTT時代に東大助教授だった先生からテキストなしで頂いたテープが聞き取れないままであったのを、帰国後に聞き返すと、どうしてこのように簡単な内容が聞き取れなかったのかと驚きました。自宅では、学者一家のベトナム人を家庭教師にして学び、別の日にはフランスが支援する現地の教室へ家内と夜に通いました。日本でも使用されている有名なテキストに「クリスマスが近づくと、日が次第に短くなる」とあったのが、現地人には全く分からず、質問を繰り返していました。その後に暮らしたマレーシアの首都クアラルンプールでは、一年中、朝七時一五分に夜が明け、しかも太陽は真直ぐに昇るので直ぐに明るくなりました。

一方、仏語が国内のどこでも通用したので、国内が安全であったこともありますが、私たち日本人専門家のみで、前記のラタナキリやラオス国境、その後ポルポトの拠点となった宝石の産地のパイリンなど、どこへでも何一つ心配なしにドライブできました。いまは、プノンペンの大通りにある立派な商店でも、仏語はもとより英語すら通用しません。多くの学者が殺された国で優れた外国語辞書を編集することは困難でしょう。また、各種の文

献や図書の翻訳も不可能でしょう。折角、仏語が普及していたのに、一五〇〇万の人間しか話さないカンボジア語の社会としてしまい、世界と通じる窓口を民族主義のために狭くしてしまったのは残念なことです。マレーシアでも社会で優れた能力を発揮する中国人よりも優位に立つために導入されたマレー人優先政策により、教育を従来からの英語でなく、できる限りマレー語で行う方向へ進んだために、以前は高校卒と同時に海外留学ができたのに対して、高校卒業後に、一年間英語の補習授業を受けないと外国の大学に合格できなくなりました。この反省をもとに、約一〇年前にマレーシア政府は英語教育の強化政策を打ち出しました。一五年ほど前に訪れた当時のブラジルは豊富な資源に恵まれ巨大な面積を持ちながら、全体的には貧しく見えて不思議に思いました。それはポルトガル語という狭いチャネルでしか世界が見えないからだと思いました。日本が国際競争で次第に遅れを生んでいるのも、日本での細事の報道ばかりに一生懸命になっているマスコミの責任が大きいと思います。宇宙開発でも、日本人が関係した時のみ大きく報道し他の時は全く報道しないので、最も大切な一連の発展は分からず仕舞いであり、ピアノ・コンクールで二人が一位になっても、日本人のみが一位のような報道で他の人は中国人とチラリと報道するのみで、男性か女性かも報道せず、オリンピックで日本人が三位に入賞した時に一位と二位について報道しないこともありました。私は日本の新聞は日本地方紙だと評価し、情報

鎖国の国だと言っています。世界の一流英文紙誌を読んでいる人たちとの競争力の差を憂います。

六、国内諸事情

（1）プノンペンから約二〇〇キロメートル南で、ベトナムにごく近い海辺にケップという保養・海水浴場がありました。海は砂と言うよりはドロに近かったのですが、シアヌークビルのように体を刺す虫がいないのと、海産物に恵まれて、「フリュイ・ド・メール（海の果物）」という、海老、蟹、貝などを大皿に盛って出す料理が有名で、そのために、わざわざプノンペンから正露丸持参で出かける人々もありました。二〇〇一年に郷愁に駆られてこの地を訪れましたが、クメールルージュの支配下にあったとかで、侘びしくさびれて昔の面影は全くありませんでした。

（2）プノンペンと唯一の海港シアヌークビルを結ぶ国道四号線は、米国と国交のあった時代に米国が寄贈した立派な道路でしたが、当時は十分な保守ができていなくて、泥道になっている部分もありました。キリロームという松林の美しい景勝の地などの森林地帯

などを通り、シアヌークビル近くになると、正に熱帯のジャングルの中に道を切り開いた光景でした。道の両側には非常に高い木々が足の踏み入れる余地も無いほどに生い茂り、木々の間をツタが密接に絡み合っている素晴らしい景観の道路でした。しかし、二〇〇一年にこの道路を走って驚きました。ポルポトが完全に伐採して材木としてタイ国へ売却してしまったのです。広々と見渡せる荒地がどこまでも広がっていました。残酷なことです。マレーシアのように、パーム油が採取できるパーム椰子を積極的に植樹すれば、大きな輸出産業に成長させられるのではないかと思いました。二〇〇一年に、国道四号の中間付近で小規模に植樹されているのを見ましたが、積極化を期待します。

シアヌークビルは海港とはいえ、当時は出入りの船も少なく、近くの海水浴場は白砂に水は青く透明な汚れの全くない美しさでした。訪れる人は外国人が主体で少なく、ガレージ付きの一個建てのコテージが適当な間隔をおいて海岸に平行に一列に建てられた、プライバシー十分な海辺でした。

（3）タイとの国境に近く、ポルポトの本拠でもあったと言われるパイリンは宝石の産地です。最も有名なのはジルコンで、取り出された時は地味な黄色がかった石に過ぎないが、加熱によって無色透明となり、研磨して安価なダイアモンドの代品として利用されま

す。量的にははるかに少ないがサファイアもとれました。現地では、宝石を含んだ泥水を竹のザルですくって選別していました。プノンペンの自宅へもこれらの宝石を売りにきましたが、中央市場に面した「メコン」という高級宝石店に持参すると、希望の装身具に加工してくれました。

七、気象

昔は乾期と雨期が明確に区分できました。五月になると雨期が始まりますが、乾期中にすべてが乾いてしまった熱い地上に雨が降るために、水蒸気の多いムーとした不愉快な状況から始まります。朝のうちに降雨が始まり、次第に降雨の時刻は後ろの方へずれて行きます。雨期になると太陽のない曇り空となり、砂漠のようになってしまう乾期末よりは気温も下がり過ごしやすくなります。降雨はスコール式で短時間で止みますが、九月頃から降雨は次第に夕方に近づき、昼間のように激しくない代わりに降雨時間が長くなります。昼間の強烈な太陽の影響と、それがない夜間の違いでしょう。一〇月になると少し鬱陶しいような降り方をしながら、最後には降らなくなります。これで乾期の到来です。二〇〇一年の一月に激しい夕立を経験しましたが、昔はそのような心配がなかったので、自動車

のワイパーを、盗難と劣化の防止のためにどの自動車からも外して、車のトランクなどに翌年五月まで収納しました。

自動車で郊外や都市間の道路を高速で走っていると、「あそこから雨」という境が前方に明確に分り、そこへ突っ込むと、一挙にザーと滝のように雨がフロント・ガラスに当たり出します。一般に農村部の婦人は黒い衣装をまとっていましたが、傘など役に立たず濡れるままにスコールの道を歩き続けて、短時間で終わる降雨の後もそのままに歩き続けると、目的地までに着物が乾きました。スコールが滝のように激しく降っていたために、自宅前に車を停止させてもドアが明けられず、降雨が静まるのを待っていたこともありました。ＰＴＴの職員も傘を持っていない人が多く、朝の内に降雨があると途端に出勤率が大きく低下しました。

一一月の乾期を迎えると、「待ってました」とばかりに結婚式のシーズンです。ＰＴＴの職員の多くは出身地の農村部で式を挙げ、日本人専門家夫妻の出席を期待します。暑くても女性は着物で出席すると非常に喜ばれました。カンボジア料理が振舞われ、ランボンという音楽で、日本の盆踊りのような踊りを踊りました。

アンコールワットの観光も、一年で気温がもっとも低く雨の心配のない一二月が最適の季節と言われていますが、日本からの観光客は冬の出発のために、汗を拭き拭きの観光で

つらそうでしたが、現地に暮らしている日本人は涼しい顔をしていました。

雨期末には、空中から見るとカンボジアは水害に見舞われるのかと思わせるほどに田圃など地上に溢れていますが、乾期に入るとこの水がどんどん蒸発します。水による気温の上昇を抑制していた機能が低下し、二月頃から気温の上昇が始まり、地上のあらゆる場所がカサカサに乾燥する四月にピークに達します。エアコンを購入する資金がなかったために、子供には汗疹ができ、私たちも寝苦しくて眠れませんでした。二時間ほどの間隔で、水のシャワーを浴びて濡れたままで寝て、水の蒸発熱で体温上昇を緩和することを一晩繰り返す苦しい期間がありました。

八、飲料

フランスの旧植民地だけあって、各種の飲み物が経験できました。まず到着の夜に中華料理店で先任者から勧められましたのが、それまで経験したことのない、ヘネシー・コニャックのソーダ割でした。ウイスキーでのハイボールよりも爽やかで不思議な高級飲み物でした。後日NTTのバンコック事務所へコニャックをお土産に持参したところ、日本流に、コニャックグラスに入れて、そのままに飲んでおられるのを見て気の毒になりました。

フランス人は、熱帯地方での美味しい飲み方を発明していたのです。フランス人はカンボジアではヘネシーを、ベトナムではマルテルを、それぞれ最高のコニャック酒として現地人に信じ込ませて、上手に市場分割し独占していました。

ビールには大瓶の青島ビールとベトナム系の小瓶の〔33〕（トラント・トロワ）がありました。最近はインフレ的表示の一桁多い〔333〕になってしまいました。地方へ行くと、電気が全くないか、夜間のみ給電のために、電気冷蔵庫がなく、ビールを注文すると、布で包んで解け難くしていた氷を、中国式の強力な包丁で四角柱状に割った大きな一片を縦向きに入れたグラスが運ばれてきました。注文した温かなビール瓶から、客がこのグラスに少しずつ注いで冷やしながら飲むスタイルでした。

九、ポルポトの一見不可解な行動

これを理解するには、昔のカンボジアの社会構造を十分に知る必要があります。一般の日本人や西欧人は経験しない状況がその裏に存在しましたので、まずそれを説明します。

（1）フランスがインドシナ三国を支配していた時は、仏人を表面に出さず、カンボジ

アの政府役人と警察官には、すべてベトナム人を充て、間接支配をしていました。

（2）独立後のプノンペンでのカンボジア人は、ベトナム人に代わっての政府の役人と警察官、それに前述のシクロの運転手が大部分でした。政府の役人は、頭の良い子供が生まれてきて、かつ実家が豊かな中国人と結婚したいとの希望を持っていました。日本人女性も当然それ以上の対象でした。

（3）プノンペン市内の商業は完全に中国人が支配していました。

（4）プノンペン市内の、マッチ工場、自動車の整備工場など機械に関する職業は完全にベトナム人が独占していました（ベトナムが自由社会に復帰した直後に、大阪市労働組合からハノイ空港用に寄贈した古い市バスが、運転席はもちろん、乗客が乗降する自動ドアまでも反対側に付け替えて機能させているのを見て、非常に驚き、ベトナム戦争で捕獲した武器をすぐに修理して反撃に使用できたのも当然と思いました）。また、手網を静かにトンレサップ川に沈め、一〇秒も待たずに、それを挙げると小魚がピチピチと跳ねていて、見ていた日本人を驚かせたほどに、魚資源は豊かでしたが、仏教徒のカンボジア人は殺生をしないとの噂もあり、漁業はベトナム人が行っていました。

（5）多くの中国人にとっては、ここで生まれ育っても、カンボジア語の知識は全く不要で、日本人クラブで勤務していた中国人の女性なども仏語と広東語で何ひとつ不自由し

ていませんでした。私たちのレポートや役所などへ提出する書類もすべて仏語でした。

（6）旧仏領インドシナ三国の間では、ベトナム、カンボジアさらにラオスと、民族間の優劣が明確で、誰もがそれを認めていました。シアヌーク殿下が「最近、外国のジャーナリストの中に、カンボジアがラオスの下であると言うけしからん人間がいる」と発言されたこともありました。

（7）バーにしても、勤務するホステスの人種に応じてクラスが三段階に分かれていました。日本人は中国人のホステスがいるバーへ行くのが普通でした。カンボジア人のホステスには、お客をもてなす気持ちが著しく欠けていました。

（8）料理にしても、どこでも食べられる中華料理に続いて、ベトナム料理がありましたが、カンボジア料理を食べさせるレストランは簡単には見つかりませんでした。

要するに、プノンペンはカンボジア国の首都であったにも関わらず、そこの主役はカンボジア人ではなく、外国系の人間たちでした。カンボジア人にとっては、外国人に占拠され繁栄している首都であったのでしょう。

そこで、素朴な愛国者は、カンボジア人の首都にするには、まずその時のプノンペンの主役である中国人とベトナム人を首都外に追放し、適切な処理の方法が無いので全てを殺

戮し、同時に主役と密接な関係で甘い汁を吸っているカンボジア人高級官僚やインテリも同列に扱う必要があると考えたのでしょう。

完全に住民を追い出したプノンペンに、新たにカンボジア人を住ませて、カンボジア人が支配する首都にしたかったのでしょう。

しかし、目を背むけさせる激しい拷問をしながら、多数の人々を殺して行ったことについては、「何故に、何を」自白させようとしたかについては推定ができません。

親しく共に暮らし、帰国に当たっては涙を流して別れを惜しんでくれた若いベトナム人の子守や、明るく忠実で有能だった中国人の女中が、このような悲惨な処遇の先に殺害されたことを想像すると、心が痛む思いで一杯です。

（ＮＰＯ ＢＨＮテレコム支援協議会理事）